

## 翻訳者・解説者紹介 (五十音順)

### 李 眞恵 (い じんへ)

日本学術振興会外国人特別研究員、韓国ソウル出身。韓国外国語大学中央アジア語科時代にカザフスタンに留学し、コリヨ・サラムとの交流の経験からコリヨ・サラムに関心を持ってきました。同大学大学院で修士課程を経て、二〇一三年に渡日し、二〇一九年に京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科でカザフスタン・コリヨ・サラムに関する研究をテーマに地域研究博士学位を取得しました。コリヨ・サラムの文学の展開と復興を導いてきた『コリヨ・イルボ』（高麗日報）を主な研究資料として研究している中、コリヨ・サラムの文学に関心を持つようになり、彼らの作品を読んでいます。現在は、立命館大学に所属しており、著書を執筆しています。

### 石井 啓一郎 (いし い けいいちろう)

一九六三年生まれ。ここ数年アゼルバイジャン語文学に集中的に取り組んできたのは、

当研究会で二〇一五年に行ったシンポジウムが直接的なご縁でしたが、原点はイランのアーザリー系ペルシア語作家であったサマド・ペフランギーの作品に自分と波長が合うものを感じたからでした。けれど「マイノリティ」に本能的に心を惹かれる個人的傾向の真因は、遠い昔、ブラジル・米国育ちの「帰国生」として日本の小学校へ逆輸入されたとき、何においても周囲と「違う」ことが寸分も許容されないことに度肝を抜かれ、子供心に「わが祖国」に対して困惑を覚えた実体験に遡るのかもしれない。

もとよりクラシック音楽、特にオペラ、バレエの熱烈でオタク的な愛好者ですが、アゼルバイジャンに関わって、ザカフカースの民俗的な音楽素材や物語から国民楽派的なオペラを数多く創った作曲家ユゼイル・ハジュベヨフを知り、ここ数年の文学への取り組みに新しい視点として活かせないかと最近しきりに考えています。

### 石川 清子 (いしかわ きよこ)

一九五五年、千葉県生まれ。七〇年代、シユルレアリスムやヌーヴォ・ロマンなど、フランス文学の「前衛」から出発して、前世紀の終わりにマグレブ（北アフリカ）、とりわ

けアルジェリアのフランス語小説にたどり着きました。何冊か訳書を出し、著者すべてにお会いすることができました。今回抄訳したジェバルとは二〇〇九年、パリのアパルトマンで。辛口批評の熱弁にたじろぎました。急逝した作家と過ごした貴重なひと時でした。マグレブ作家の訳書として、タハール・ベン・ジェルーン『不在者の祈り』（国書刊行会、一九九八年）、アジア・ジェバル『愛、ファンタジア』（みすず書房、二〇一一年）、ヤミナ・ベンギギ『移民の記憶』（水声社、二〇一九年）。現在、レイラ・セバルの初期小説を翻訳中。セバルもベンギギもアルジェリアに根ざした作品を書いています。フランス在のフランス国籍。両義性、越境性がこの文学の面白さでもあります。

### 磯部 加代子 (いそべ かよこ)

一九七三年生まれ。一九九九年から二〇〇一年までトルコのイスタンブール在住。二〇〇二年から二〇〇五年まで日本のトルコ企業に勤務。二〇〇三年より埼玉県川口・蕨市を中心に居住しているクルド人難民申請者たちの通訳などを行う。二〇二〇年十一月より在日クルド女性を主な対象者とした、オンラインによるマンツーマンの日本語教室を

オーガナイズ。

作品の翻訳を通じて知り合ったクルド人作家たちや、在日クルド人ネットワークの協力を経て完成した、クルドの吟遊詩人であるデングベジュを巡る中島夏樹監督のドキュメンタリー映画Voices from the homeland(二〇二一年)の撮影通訳、字幕を担当。デングベジュとはクルド語で「声を伝える者」と言う意味なのだが、撮影旅行を通じてクルディスタンと呼ばれるトルコ南東部各地のクルド人たちの様々な声と出会うも、皮肉なことに、この声をトルコ語を通じて伝える役目を担うことになった。いよいよクルド語の習得に乗り出すか、否か、それが問題だ。

著書に『旅の指さし会話18トルコ』(情報センター出版局、二〇〇六年)。共著に『クルド人を知るための55章』(明石書店、二〇一九年)。訳書にオルサー・ラマザン『魂の視線〜光の教師からあなたへ真実のメッセージ』(高木書房、二〇一一年)。ムラトハン・ムンガン編『あるデルスィムの物語』(さわらび舎、二〇一七年)。

## 鶴戸 聡

(うど さとし)

南九州出身。東大駒場に十数年学んでようやく博士号を取得(地域文化研究専攻)。故郷の鹿児島大学に七年勤めたのち明治大学国際日本学部で教鞭を取ることになりました。学位論文はアルジェリアの作家を論じた「コスモグラフィ―としてのカテブ・ヤシン作品―」アフリカ性と民衆の詩学をめぐって―に研究してきましたが、アルジェリアやモロッコの新しいアラビア語小説の紹介も目指しています。地域としての仏語圏を軸にして、東アジアとの比較を交えつつ、アラブ・ベルベル文学を多言語的に理解していきたいと考えています。なおアルジェリア独立五十周年を機に「マグレブ文学研究会」を立ち上げました。水声社のマグレブ文学コレクション「エル・アトラス」でカメル・ダーウド『もうひとつの『異邦人』』を翻訳しています。

## 岡 真理

(おかまり)

一九六〇年生まれ。専門は現代アラブ文学。東京外国語大学アラビア語科でアラビア語とアラブ文学を学び、学部四年のときにエジプト・カイロ大学に留学(一九八二―八三年)。

修士課程修了後、一九八八年から九一年まで、在モロッコ日本国大使館に専門調査員として三年ほど勤務しました。現在は、京都大学大学院人間・環境学研究科の教員として、アラビア語と、ポストコロニアル思想文化の一環としてパレスチナ問題などを教えています。

学部生のとき、ガッサーン・カナファアーニの『太陽の男たち／ハイファに戻って』を読んで大きな衝撃を受け、文学を通してパレスチナ問題を思想的に考えたいと文学の道を目指しました。翻訳は、『季刊 前夜』(二〇〇四―二〇〇八年)にカナファアーニの短編いくつかと「ハイファに戻って」の新訳を連載。ほかにターハル・ベン・ジェルーン『火によって』(原作仏語、以文社、二〇一二年)など。著書として『アラブ 祈りとしての文学』(みすず書房、二〇〇八年)、『ガザに地下鉄が走る日』(みすず書房、二〇一八年)ほか。

## 岡崎 弘樹

(おかざき ひろき)

一九七五年生まれ。専門は、アラブ近代政治思想、および現代シリア文化研究。二〇〇三年から〇九年にかけて仏研究所研究員や日本大使館の政務アタッシュェとして Damas 滞り。元政治囚のシリア人作家たちと付き合う中で、彼らの生命力と知的誠実さ

に感銘するとともに、一九世紀以来のアラブ人思想家による自己批判の精神史の解明を志す。パリ第三大学アラブ研究科で社会学博士号を取得。二〇二一年度まで、日本学術振興会特別研究員（PD）、京都大学や大阪大学ほかで非常勤講師を務める。二〇二二年度より亜細亜大学国際関係学部多文化コミュニケーション学専攻教授。著書に『アラブ近代思想家の専制批判―オリエンタリズムと〈裏返し〉のオリエンタリズム〉の間』（東京大学出版会、二〇二二年）、訳書に『ヤシーン・ハージュー・サーレハ『シリア獄中獄外』（みすず書房、二〇二〇年）など。

## 小谷 真由（おだに まゆ）

一九九四年生まれ。同志社大学文学研究科博士前期課程。専門は現代アメリカ文学。卒業論文では、翻訳が原文にいかに入介入することになるのかについて考察した。修士論文では、女性作家による移民文学における「名前」と「書くこと」に注目し、登場人物のアイデンティティ形成について論じる予定。雑誌EYESCREAMにおいて、ミシェル・クリフの短編「トランペット吹きの子が追放される」を藤井光先生と共訳。

## 木下 実紀（きのした みき）

長野県出身、一九九三年生まれ。大阪大学外国語学部ペルシア語専攻卒業、同大学言語文化研究科博士前期課程修了、現在は後期課程に在籍。二〇一九―二〇二〇年にかけてイランのテヘランに留学。滞在時は、国内でのデモによるインターネットの遮断や、ガージェム・ソレイマーニー司令官の暗殺、そしてコロナ禍に至るまで、混乱下のイランを体験。今回は現代文学作品を翻訳したが、普段はイラン立憲革命期の文学を研究対象としている。とりわけ、当時の翻訳文学作品に独特の創造性が見られることに惹かれ、原作との差異を明らかにしながら研究に取り組んでいる。

## 金 友子（きむうちや）

一九七七年生まれ。立命館大学文学研究科博士後期課程単位取得退学。専門領域は在日朝鮮人をめぐる問題、ジェンダー研究・フェミニズム理論など。在日朝鮮人をはじめとして朝鮮半島から世界各地に離散した朝鮮民族のエスニック／ナショナルアイデンティティと彼等・彼女らの歴史と思想を研究する傍ら、離散民が居住国において社会的マイノリティとして直面する差別や抑圧の問題に関心

をもってきた。二〇〇〇年代初頭に韓国に二年間留学、現在は立命館大学で朝鮮語を教えている。これまでの訳書に『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション——人種、ジェンダー、性的指向・マイノリティに向けられる無意識の差別』（共訳、明石書店、二〇二〇年）、『社会学的想像力の再検討——連なりあう歴史記述のために』（岩波書店、二〇一三年）、『生と芸術の実験室スクウォット―スクウォットせよ！抵抗せよ！創作せよ！』（インパクト出版会、二〇一一年）などがある。

## 久野 量一（くの りょういち）

一九六七年生まれ。東京外国語大学准教授。専門はラテンアメリカ文学で、メキシコ留学時代にはじめて行ったキューバ、「内戦」と呼ばれる時期に足を運んだコロンビア、この二つの国の文学に常に関心や愛着を持っています。最近の関心はテストイモニオ（証言の文学）で、キューバでは革命後にこのジャンルが半ば公式化して多くの作品が生まれました。当事者の固有の語りと芸術家の普遍化の力がぶつかり合うテストイモニオという場所に魅力を感じています。

著書として、『島の「重さ」をめぐって

——キューバの文学を読む』（松籟社、二〇一八年）、翻訳書として、フアン・ガブリエル・バスケス『コスタグアナ秘史』（水声社、二〇一六年）、カルラ・スアレズ『ハバナ零年』（共和国、二〇一九年）、エドゥアルド・ガレアノ『日々の子どもたち』あるいは366篇の世界史』（岩波書店、二〇一九年）があります。

## 佐藤 愛（さとうまな）

一九九〇年生まれ。京都大学人間・環境学研究所修士課程修了。パレスチナ人を中心とした難民・移民による英語文学に関心がある。現在はフリーランス英日翻訳者として映像作品、論文、ゲーム等の翻訳を手がけつつ、米国現代詩にあらわれるパレスチナ人の体験や「home」のあり方に注目している。

論文に「在米ディアスポラ詩人スヘイル・ハンマードにおける『パレスチナ』——記憶の継承、ブラック・アメリカ、そしてパレスチナ人になること」（修士論文、二〇一八年）、「未来のパレスチナ——在米ディアスポラ詩人スヘイル・ハンマードにおける「home」と「people」」（『日本中東学会年報』第三四―二号、二〇一八年）。翻訳作品にセルビア映画『鉄道運転士の花束』、レバノン映画『消された

存在、——立ち上る不在』（いずれも「佐藤まな」名義で日本語字幕を担当）など。

## 新郷 啓子（しんこう けいこ）

一九五〇年生まれ。フランスそしてスペインに暮らして四十二年経ちます。『中東現代文学選2016』で西サハラの人々の手記を抄訳する機会をいただき、二度目の参加となります。今号では、西サハラ（旧スペイン領サハラ）のスペイン人引揚者が書いた物語と、アルジェリアの新人作家の小説を取り上げました。翻訳作業の終了から月日を経て、自分が日常生活でつぶやく独り言の中に、作中人物たちの台詞が口について出ることがあり、「交流」の不思議な作用を味わいます。著書『蜃気楼の共和国?』（現代企画室、一九九三年）、『抵抗の轍』（インパクション出版会、二〇一九年）。共訳書『チエルノブイリの犯罪』（緑風出版、二〇一五年）。

## 鈴木 克己（すずき かつみ）

一九六四年生まれ。東京慈恵会医科大学教授。医学部医学科に籍を置いているが、医師ではない。大学ではドイツ語とヨーロッパ文化の授業を担当している。イギリス医学を

範とする大学にあってドイツ系に属すとすれば、傍流中の傍流。またドイツ文学でも「移民を背景にもつ作家」を専門とするので、これまた傍流。その川が流れ流れて中東という大河に至る。著書として『現代ヨーロッパ文学の動向』（共著、中央大学出版、一九九六年）、『聖書を彩る女性たち』（共著、毎日新聞社、二〇〇二年）、『知っておきたいドイツ文学』（共著、明治書院、二〇一二年）。

## 鈴木 珠里（すずき しゅり）

東京外国語大学地域文化研究科博士課程前期修了。現代イランにおける女性詩人の作品を中心に研究。中央大学総合政策学部・上智大学言語教育センターなどでペルシア語の非常勤講師を務める。主な出版物として、ジャーレ（本名、アーラム・タージ・ガール・エムマガミー）『古鏡の沈黙』（ザフラー・ターヘリー解説、共訳、未知谷、二〇一二年）、『現代イラン詩集』（共編訳、土曜美術出版販売、二〇〇九年）、『イランを知るための88章』（共編著、明石書店、二〇〇四年）。

## 田浪 亜央江 (たなみ あおえ)

東京外国語大学アラビア語学科時代にシリアに留学し、パレスチナ難民の家庭に下宿して以降、パレスチナ問題に関心をもつてきました。一橋大学言語社会研究科修士課程修了。博士課程在学中にイスラエルのアラブ・コミュニティの調査を目的にイスラエルに留学するものの、博論を提出しないうまま気がつけば生活に追われてきました。国際交流基金中東担当専門員、非常勤講師、成蹊大学アジア太平洋研究センター主任研究員を経て、二〇一七年に広島に移り、広島市立大学国際学部で教えています。現在の研究テーマは、まずオスマン末期から現在に至るまでのパレスチナ人のワタン意識の変遷について、「移動」を切り口に考えること。二つ目は現代パレスチナのパフォーミングアート。そして三つ目としては、地元にある広島朝鮮学校卒業生らと接点をもつようになったことがきっかけで、中途半端なままになっていたイスラエルのアラブ人についての研究を再開しました。在日朝鮮人とイスラエルのアラブ人の文学やアートを比較する視点で見ると、気が付くことが多いです。

## 中村 菜穂 (なかむら なほ)

一九八一年生まれ。郷里岩手を離れて大阪外国語大学でペルシア語を学び、東京外国語大学大学院に進学、二十世紀の詩人ナーデルプールの生涯と詩の研究から、修辞学、現代詩壇・批評の移り変わりに関心を持つようになりしました。イラン文学史の分岐点である一九二〇年前後の文学状況を明らかにしようとする論文で約十年、近代の立憲革命詩人たちの詩作と生涯を辿った博士論文を二〇二〇年に提出しました。この間、『イランとイスラム』(森茂男編、春風社、二〇一〇年)、『現代イラン詩集』(共訳、土曜美術社出版販売、二〇〇九年)、ジャールレ(本名、アーラム・リッタージ・ガエムマガーミー)『古鏡の沈黙』(ザフラー・ターヘリー解説、共訳、未知谷、二〇二二年)、『イラン研究万華鏡』(共編、東洋研究所、二〇一六年)、『世界の文学、文学の世界』(奥彩子ほか編、松籟社、二〇二〇年)などに携わりました。イランの文学を読むことと日本語で伝えることを目指す日々です。

## 野中 葉 (のなかよう)

東京都出身。二〇一一年慶應義塾大学政策・メディア研究科後期博士課程修了、博士号取得(政策・メディア)。高校時代に一年間留学して以来、インドネシアの魅力に取りつかれ、専門は地域研究(インドネシア)。主な関心は同地域におけるイスラームの受容や実践とその広がり。文学を専門に研究しているわけではないものの、現代のインドネシア社会におけるイスラームの表象に関心があり、特に、若者や女性たちに向けて書かれ、読まれている小説には注目しています。主な業績に、『インドネシアのムスリムファッション——なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』(福村出版、二〇一五年)、『インドネシアのムスリム活動家たちの結集——世界的に稀な女性ウラマー会議開催』鷹木恵子編『越境する社会運動 イスラーム・ジェンダー・シリーズ 第2巻』(明石書店、二〇二〇年)、『Islamic Novels: Popularizing Islamic Values』, Aiko Kurasawa and William Bradley Horton eds. *Consuming Indonesia – Consumption in Indonesia in the Early 21st Century*: 193–215, Jakarta: Gramedia, 2015. 『イスラーム短編小説の広がり』とインドネシアの女性たちのイス



ラーム覚醒『アジア・アフリカ言語文化研究』  
87号、二〇一四年）など。

## 福田 義昭（ふくだ よしあき）

一九六九年生まれ。大阪外国語大学大学院・博士後期課程修了。アラビア語・アラブ文学。現在、大阪大学大学院・言語文化研究科准教授。二十代のころ、エジプトとシリアにそれぞれ二年ほど暮らしました。両国に大きな愛着を感じていますが、読んでいる文学作品はエジプトに偏りがちで、シリアの作家は少ししか読んでいません（かつてダマスカスの居酒屋で出逢った初対面の私に「読んで気に入ればよし、気に入らなかつたら俺に手紙をよこせ」と言って自作の短篇集をくれたラッカ出身の作家はいまどこで何をしているのか、ふと気になります）。地元神戸に暮らしていた昭和戦前・戦中期の外国人ムスリムのことも調べています。近著は『昭和文学のなかの在日ムスリム』（ACRI Research Paper Series16、東洋大学アジア文化研究所、二〇二〇年）、『例文で学ぶアラビア語単語集』（共著、大修館書店、二〇一九年）などです。

## 藤井 光（ふじい ひかる）

一九八〇年大阪府高槻市生まれ。北海道で学んだ九年間、京都で教えた十二年間を経て、現在は東京大学文学部・人文社会系研究科准教授。専門は現代アメリカ小説ですが、二十一世紀の移民作家たちの翻訳をきっかけにして、最近では東アジアの英語文学が抱え込んだ屈折に興味があります。最近の訳書はリン・マー『断絶』（白水社、二〇二一年）、アルフィアン・サアット『マレー素描集』（書肆侃侃房、二〇二一年）など、しばらく東アジアと関連する仕事が続きます。

## 藤元 優子（ふじもと ゆうこ）

留学中に一九七九年のイラン革命に遭遇、全学ストの暇に飽かして書店巡り、手に取った小説がきっかけで現代文学の世界に足を踏み入れることになった。第一歩はジャラル・アーレーアフマドという社会派作家を扱ったが、近年は元気な女性作家群に焦点を当てて研究してきた。若い同僚たちと『すばる』（二〇〇八年十二月号）に「イラン女性文学」特集を組むことができたのをきっかけに、七人の作家の作品を一編ずつ集めた訳書『天空の家―イラン女性作家選―』（段々

社、二〇一四年）を出版。その後、二〇一九年に大同生命国際文化基金アジアの現代文芸シリーズのイラン第一作として上梓した『ゾヤ・ピールザード選集 復活祭前日』で、二〇二〇年度日本翻訳家協会翻訳特別賞受賞。

## 細田 和江（ほそだ かずえ）

大学共同利用法人人間文化研究機構・総合人間文化研究推進センター研究員／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特任助教。

イスラエル文学・文化を中心に研究を行っている。ヘブライ語とアラビア語など複数の言語の使用・影響を持つ多言語文化に関心がある。翻訳にサイド・カシユーア「ヘルツル真夜中に消える」（秋草俊一郎ほか編『世界文学アンソロジー』三省堂、二〇一九年）、エトガル・ケレット「たったの十九・九九シエケル（税、送料込）で」（奥彩子ほか編『世界の文学・文学の世界』、松籟社、二〇二〇年）がある。

## 宮下 遼（みやした りょう）

一九八一年、東京都生まれ。東京外国語大学トルコ語専攻科卒業、東京大学大学院博士

後期課程単位修得退学。現在は大阪大学言語文化研究科准教授。専門はトルコ文学（史）、文化史。単著に『多元性の都市イスタンブール・近世オスマン帝都の都市空間と詩人、庶民、異邦人』（大阪大学出版会、二〇一八年）、『無名亭の夜』（講談社、二〇一五年）、編著『Shaping The Field of Translation: In Japanese ↔ Turkish Contexts (Berlin, Peter Lang, 2019)』、訳書にオルハン・パムク『無垢の博物館』、『わたしの名は赤（新訳文庫版）』、『雪（新訳文庫版）』、『僕の違和感』、『赤い髪の子』（早川書房）他。

## 森 晋太郎（もり しんたろう）

一九六七年、福岡県生まれ。アラビア語通訳・翻訳者、東京外国語大学非常勤講師。シリアのダマスカスに一九八九年から二年間、レバノンのベイルートに一九九九年から二年間留学。この二つの国を中心にアラブ近現代文芸に関心を持っている。

## 柳谷 あゆみ（やなぎや あゆみ）

一九七二年生まれ。慶應義塾大学文学研究科後期博士課程単位取得退学。（公財）東洋文庫研究員／上智大学アジア文化研

究所共同研究員。訳書に Rihla ma'al-Haiku (Hassan' Abbas との共訳。Dinashq : Dar Alif I-Thaqafa wa al-Nashr, 2008)、『ザカリーヤール・ターミル』『酸っぱいブドウ／はりねずみ』（白水社、二〇一八年）、サマル・ヤズベク『無名の門——引き裂かれた祖国シリアへの旅』（白水社、二〇二〇年）、アフマド・サアダーウィー『バグダードのフランケンシュタイン』（集英社、二〇二〇年）など。今回の翻訳は、二〇二二年三月に逝去したフランス・アラブ研究所（ダマスカス）での恩師、ハッサン・アッバース先生に捧げます。私たちに文化の力を教えてくれた先生でした。

## 山根 美奈（やまね みな）

一九四五年、島根県に生まれる。日本大学芸術学部映画学科卒業後、テレビドラマ制作の演出手から脚本家になった。そのハードワークの慰めとしてイタリアへ通うことになり、イタリア人家族の知己を得て、五〇年近い交流が続いている。その中の一人から、ソマリヤ人やインド人移民が書いたエッセイ集を紹介されたことをきっかけとして、「イタリアの現代の移民」について、京都大学大学院人間・環境学研究科に入学、研究を始めた。二〇二〇年、同大博士（人間・環境学）

を取得したが、現在は、パンデミックとグロリーバリゼーションについて再考せねばと思いつつ、再び脚本家として活動する傍ら、さる私塾の講座で脚本作法の講師をしている

## 山本 薫（やまもと かおる）

アラブ文学研究。慶應義塾大学総合政策学部専任講師。一九八九―一九九〇年にシリア、一九九七―二〇〇〇年にエジプトへ長期留学。二〇〇二年に『前イスラーム期アラブの盗賊・無頼詩人サアリーリク』逆転世界のヒーロー』で東京外国語大学より博士号（文学）取得。訳書にエミール・ハビービー『悲楽観屋サイードの失踪にまつわる奇妙な出来事』（作品社、二〇〇六年）、ラシード・ダイーフ『眠気と眠りのあいだの狙われた空隙』（中東現代文学研究会編『中東現代文学選 2012』収録、抄訳）。エジプトやパレスチナを中心に、文学以外にも音楽や映画など、アラブ圏の文化・芸術について幅広く研究・紹介を行う。